

(5) 墨書修理銘木札 天地 三〇・三  
下邊巾 一〇・五 (挿圖13)

(表) 觀世音菩薩

(裏) 天保八年五月再彩金箔

表書本山光明寺響譽上人

御筆 專周代

#### 四 勢至菩薩胎内墨書及納入物

##### 1 胎内墨書

陀羅尼梵字

##### 2 納入物

(1) 月輪形木札 天地 七一・五  
下邊巾 三・五 (挿圖14)

(表) 梵字 勢至種子(サク)

(裏) 文治五<sub>己</sub> 天三月廿日 勾當運慶

(2) 天保八年修理銘木札 天地 三〇・三  
下邊巾 一〇・五

(表) 勢至菩薩

(裏) 天保八年五月再彩金箔

表書本山光明寺響譽上人

御筆 專周代

註一 新編相模風土記稿によれば、三浦郡卷四 大和田村滿宗寺開山良岳<sub>心蓮社相譽</sub>月十<sub>九卒</sub>の如く三浦郡一帯の寺の住職に□蓮□譽、という名は非常に多いが、納入物と同一名を見出せない。

註二 十六・七世紀の鎌倉佛師に属ケ谷住および、三橋を名乗るものは少なくない。

ミュージアム九八號三山進「十六・七世紀の鎌倉佛師覺書」参照。

註三 寛文五年修理の際に寛文五年のことを五天、五曆、など記す書き方からみて、あるいはこの文字は寛文五年に記されたものかも知れない。書體の共通も見出せる。観音、勢至の月輪形も同様である。

#### 「觀世音寺馬頭觀音像造顯考」追記

猪川和子

美術研究第百九十號所載「觀世音寺馬頭觀音像造顯考」に於て、觀世音寺大鏡に掲載される同像の胎内銘中「上座威儀師暹増」とあるのは、觀世音寺關係古文書に見出せる「上座威儀師暹増」の誤りではないかと推定し、それにより暹増の上座威儀師就在中の大治年間に同像が成立したのではないか、という推論を行つた。

昭和三十四年九月、觀世音寺收藏庫竣工によつて、講堂諸像が移安される際、住職石田琳圓師、職員與崎準氏と共に筑紫工業高校教諭小野好直氏及び學生岩瀬信太郎氏が、同像の胎内銘の寫眞を撮影され、お送り下さつた。左に掲げる寫眞がそれで、明かに「暹増」であることが判つた。右に並べたのはそのかき起しである。これによつて、推論は確定的な裏付けを得ることになり、馬頭觀音像成立の年代を明かにしうることになった。追記する次第である。

暹増